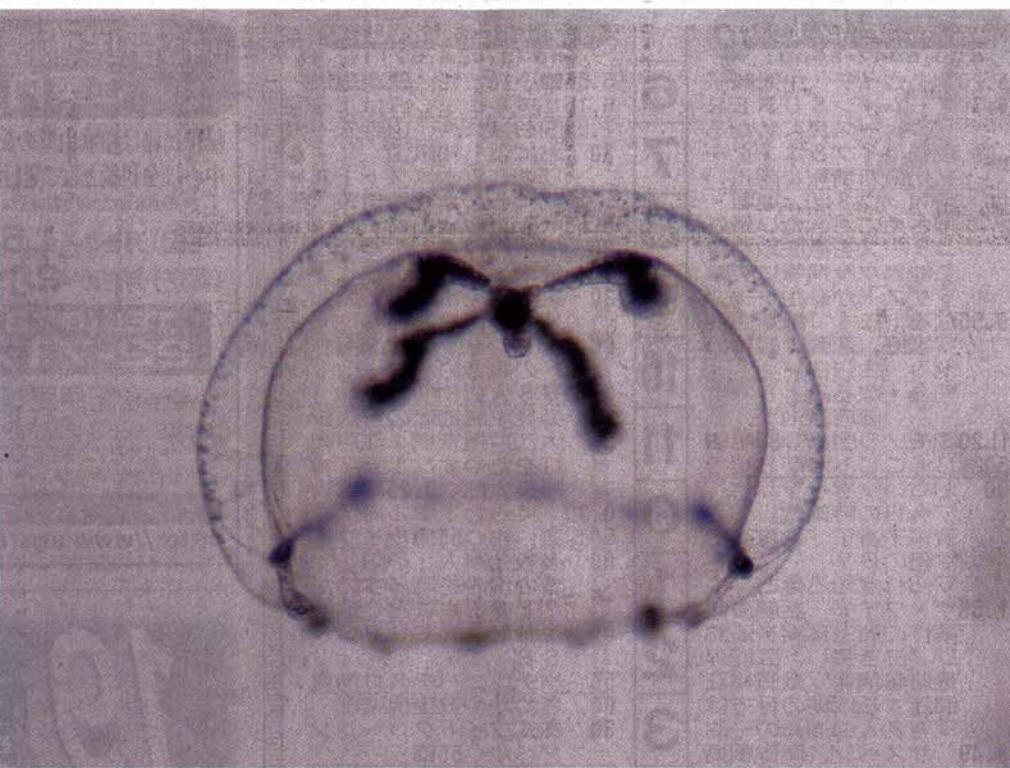


瀬戸内海に今年初めて出現したカイヤドリヒドラクラゲのクモゲ。直徑は約0・8ミリ

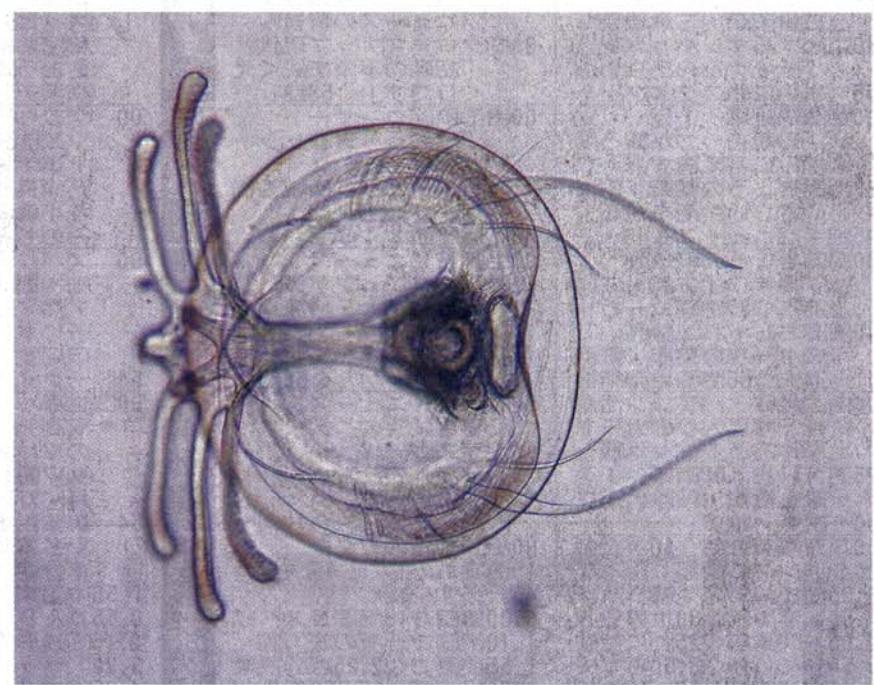


カイヤドリヒドラクラゲ 瀬戸内で初出現

京都大学助教授 久保田 信（瀬戸臨海実験所）

おの海から

49



二枚貝に似たシャミセンガイの幼生。貝殻の直径は0.6ミリ

三津浜港でフェリー乗り場すぐそばの外国船のつく港湾の岸壁で、プラントンネットを歩きながら表層をひいたりして深7㍍の海底から海表面まで垂直にひいたりしてみると、カイヤドリヒドラクラゲの成熟クラゲが立て続けに捕れた。

リブを初めて確認した。長年の調査から、三津浜港へカイヤドリヒドラクタが住むようになったのは、じつ最近のことであろうと思われる。第6回で示したように、田辺では日本でもっとも高い生率。

内瀬戸ドリーカイヤ

京都大学助教授 久保田信
(瀬戸臨海実験所)

白い海から

地球温暖化の申し子か？

り場すぐそばの外国船の
つく港湾の岸壁で、プラ
ンクトンネットを歩きな
がら表層をひいたり、水
深7mの海底から海表面
まで垂直にひいたりして
みると、カイヤドリヒド
ラクラゲの成熟クラゲが
立て続けに捕れた。

一方、港の浮き棧橋に
結ばれている鉄の鎖とア
ムラサキイガイを生きの
び、日本産のクラゲには
のボリップが発見された。
クラゲ芽を形成した個虫
を含め、総数数十個虫の
カイヤドリヒドラクラゲ
のボリップが柔らかい軟体
部の外套膜や内臓塊に、
まるでこけが生えている
ようについていた。

△

浮き棧橋から採集した
の短命のクラゲなのだ
じよつな、退化的な形態
で、雌雄差もなかつた。
イタリアを中心として、地中海に分布する別
種のチチュウカイカイヤ
ドリヒドラクラゲとはクラ
ゲのもつ2つの形質で
はつきり区別できた。ど
ちらも外見はほとんど同

の浦、大島郡久賀、山口市秋穂長浜でもカイヤドリヒドラクラゲは採集されていない。

著者が1979年に三津浜港のムラサキイガイと共生するコノハクラゲを初めて発見して以来、93年と98年に今回の発見場所と同地點とそこより約1キロ離れた三津浜港の別の地點で、ムラサキイ

調べたプランクトン調査でもカイヤドリヒドララゲがまったく捕れなかった。

かくすり合わせるような行動をしきりにした。この二枚貝のような幼生は、やがて海底に降りて、茎のよくな柄を伸ばして砂泥中に潜るシャミセンガイへと変態していくのである。

「生きた化石」であるシャミセンガイの数がある程度で減少しているこ

A dark, silhouetted image of a small, multi-limbed marine creature, possibly a polychaete worm or a larval form, against a light background. The creature has a segmented body, a prominent head with several long, thin appendages (likely parapodia), and a distinct mouthpart. Its body tapers towards the rear, which features a pair of large, pincer-like appendages.

△ 発達途上のクラゲ芽を1個形成した力
イヤドリヒドラクラゲのポリプ。体長
は約1ミリ

獲され、標本も残っていない。
瀬戸内海でも絶滅しない
ことを願う。

カイヤドリヒドラクラゲ 瀬戸内で初出現

いろいろに解剖して実体、口柄があり、感覚器（平顎微鏡で観察し、中を調べて）はただ1個の平衡石を含むことで種の同定が可能である。また、1個体ずつはずして連載32回で紹介したように、貝類が得ることもできた。この結果、島根県神戸港、玉島港や兵庫県神戸港、大坂守大坂港、香川県反島等で見られたクラゲの形態が、本種と一致する。従って、本種は、これまでに記載されたものと同一種である。

な瀬戸内海では注意が必要だつ。今回の発見は早速論文にして日本生物地理学会に投稿し、受理された。本年末発行の59巻に掲載される。

可能性もある。しかしながら、確実に地球温暖化が進行していくており、水温上昇と本種の出現と定着の関係が十分ありうるのでは、今後の究明が必要である。